

教員紹介

ご自身の研究や教育観を語っていただく「教員紹介」。今回は昨年4月に着任された大学院人間文化創成科学研究科文化科学系助教の、中野裕考先生にお話を伺います。



Hiroataka Nakano
中野 裕考

先生の公演でたまたまメキシコについていき、メキシコの国立大学は教育水準が高い割に学費がないに等しく、しかもうまくいけば奨学金も受けられることを知りました。

の一人がカントです。ですからカントが表現した物の見方から出ていこうとするなら別の前提に立つてカントを批判するのではなく、カントの著作そのものの中にカントからの出口を見出さなければなりませんと思います。博士論文で目指したのもそのことですし、今回の受賞論文もその流れです。カントは、ものごとを認識する際には「直観」と「概念」が必要だと言いますが、一般に「直観」は外部から入ってくる受動的なデータ、「概念」は人間の側から自発的に直観に当てはめるもの、と解釈されています。しかし私は、全く受動的に受け取られる直観データなど存在しない、自発性は直観を受容するためにも必要であると考えました。そう考えないと、カントの体系の中で「時間」をうまく位置づけられないからです。この問題を扱ったカントのテキストは異様な難解さで有名な数ページなのですが、私にはそこが一番面白かった。「直観」における自発性、あるいは知覚主体自身の運動を考えると「時間」を解き明かす仕組みになっている、と考えられるからです。私が踊りをやっていたのは、体を通じて考えるということが自分には欠けていることを、哲学を通して気付いたからで、即興的に身体を通して何が表現できるか、試してみたかったのです。それは、物事の知覚と身体の運動、という私の研究テーマにつながっています。

近代哲学に身体性を取り戻す

中野先生は、学部では文教育学部人文科学科、大学院では比較社会文化学専攻にご所属で、西洋哲学史、西洋近代哲学、現代哲学などを講じていらつやいます。

ご出身は？ ご専門は？

仙台市の出身です。カントを中心とする近代哲学が専門です。

なぜ哲学を選ばれたのですか

最初は東大の文I(法学部予定)に入りました。入学後、阪神淡路大震災・オウム事件・酒鬼薔薇事件などが次々に起こり、それまでの「当たり前」がいつべんに吹き飛びました。「オウム信者に向かって自分たちの方が正しいと説得できるだろうか」とか、「彼らを暴力的に排除している点で、世間も自分も彼らと同じではないか」とか、そんなことばかり考えていました。そんな中で、「自由」「平等」「人権」といった概念の内容を問わずに前提して出発する法学部の授業に違和感をもち、3年次に文学部に進学しました。私たちのものの見方・考え方・価値の意識を規定している枠組みは何なのか。現在自分や社会が抱えている問題の根元にあるその思考の枠組みを変えることができるのであればいいか。そういったことを考える学問をしたいと思ったのです。

メキシコに留学されたのですよね

修士課程在学中に博士論文の核となる構想が浮かび、それを現実化するための環境を模索していました。私は踊りをやっていたのですが、踊りの

修士修了とともにメキシコに渡り一年間スペイン語を勉強した後、メキシコ国立自治大

学哲学文学部博士課程に入学し、カント哲学について学位を取りました。お金の心配を全くせずに、朝から晩まで研究をしていればよい理想的な環境でしたよ。メキシコという国の寛大さには心から感謝しています。

カントといえば「時間に正確無比」のイメージがあるのですが…

私ももともと時間に正確な方ですが、メキシコに行って時間にルーズなことに対して寛容になりました(笑)。カント哲学とラテン文化の間でバランスがとれたかもしれません。

学会賞を受賞されたと伺いました

今年の5月に「主観の行為としての運動」という論文で、日本哲学会若手奨励賞をいただきました。先ほど言った博士論文のアイデアにも関わる問題なのですが、私も最初はニーチェ、ハイデッガー、ドゥルーズ、デリダなど、はやりの現代哲学に共感し、そこからデカルト、カントといった近代哲学を批判しようとしていましたが途中で行き詰まってしまう。あるシステムを変えるには、外側から非難するのではなく、内部からそのシステム自身の論理を展開することで変形をはかるべきだということに気づいたためです。人間は、正しいとか正しくないとか判断するのは別に、そう考えるよう歴史的・社会的に形成されてしまっているといった、通常ははつきりと意識していない思考の枠組みに従ってものごとを捉えています。現在の私たちにとって基本的なものとなっている思考の枠組みを典型的な仕方で表現している哲学者

お茶の水女子大学のご感想と、お茶大生へのメッセージをお願いします

踊りをはじめてしばらくして、舞踊教育学コースをもつ大学があると知ったときには感動しました。中に入ってみても、居心地のよい、負のエネルギーを発する人のいない、とてもいい大学だと思います。学生は優秀で真面目で、しかも柔軟性があります。一方で、優秀なのに自己評価の低い学生が多いことも気になります。皆がわかっていることをわかっていないという理由で自分は駄目だと思いついてしまう学生がいますが、皆がわかることをわからなければ駄目だと思ついても、一つでいいから自分にしかわからない問題、自分にしか作れない問題を探してみる、といった方向性で考えてみたらどうでしょうか。またたとえそれで駄目だったとしても、絶望なんかする必要はありません。次を考えればいいんですから。

文責：荻原千鶴

(大学院人間文化創成科学研究科文化科学系教授)